

教育の窓

kyoiku no mado

脱「平均」へ 探究心育てよ

人工知能(AI)が進化する中、日本の将来を担う子どもたちには、どのような力が必要とされるのか。8月8日に毎日ホール(東京都千代田区)で開かれた教育シンポジウム「AI時代に向けた教育はどうあるべきか」(毎日教育総合研究所、毎日新聞社共催)では、教育関係者ら約120人が、識者の熱弁に耳を傾けた。

【千脇康平、写真・根岸基弘】

●対話を重視

この日は、香里ヌヴェール学院中学校・高校(大阪府寝屋川市)校長の池田靖章▽立命館アジア太平洋大学(APU、大分県別府市)学長の出口治明▽文部科学省総合教育政策局長の浅田和伸の3氏が講演した。

香里ヌヴェール学院中学校・高校は、チームで課題の解決策を導き出す実践型の学習法「プロジェクト・ベースド・ラーニング」主体のカリキュラムを導入し、生徒の創造性の育成などに力を入れている。

私立高校で社会科教師を務めた後、公募に応じ今春、34歳の若さで校長に着任した池田氏は、人



池田靖章氏
香里ヌヴェール学院
中学校・高校校長

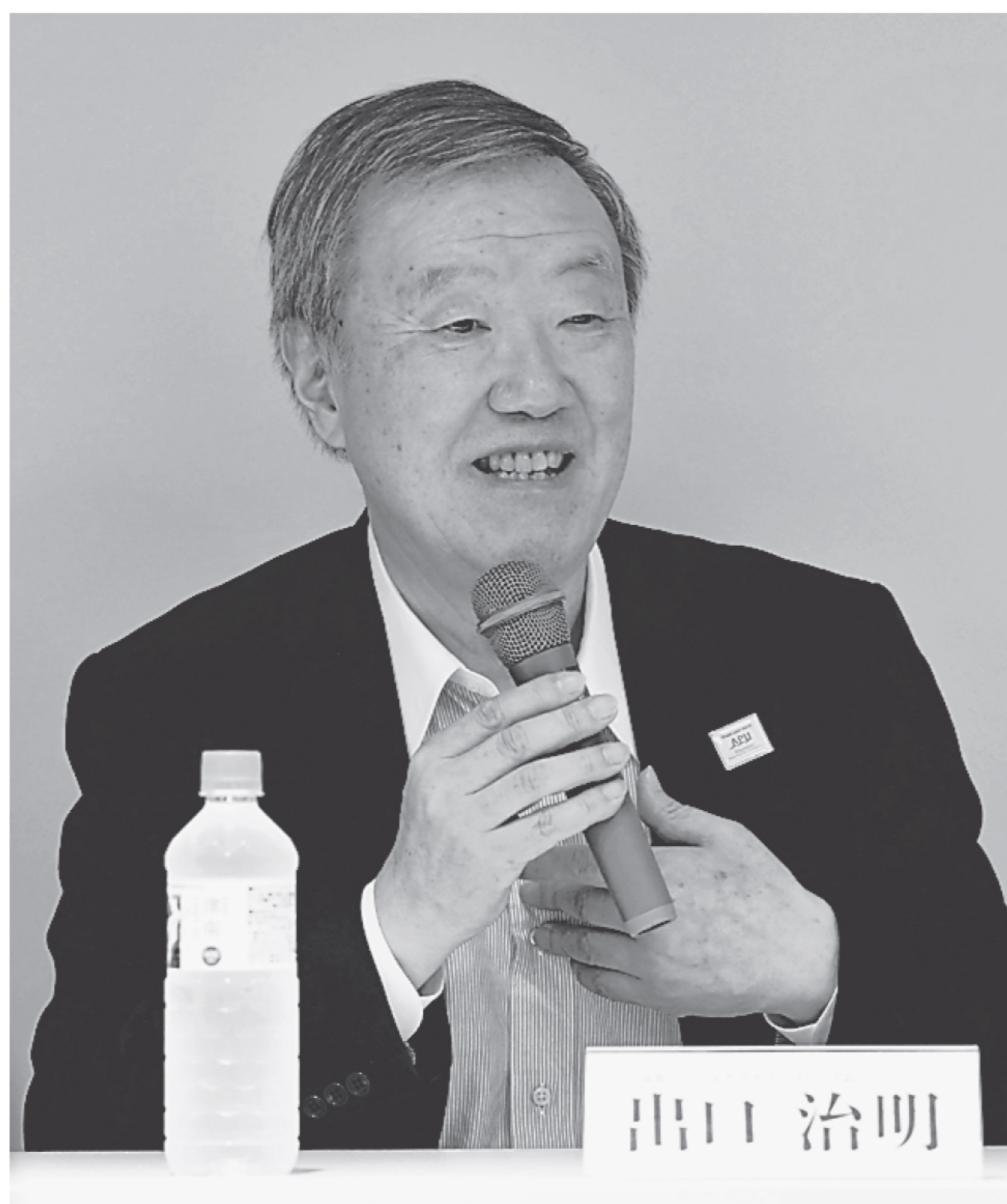
「AI時代へ向けて」シンポ

口減少の中で「AI時代」に向かう現状を「乱世」と表現し、「子どもたちの多様な価値観を担保する教育にならないければならない。それは対話的な学びだ」と主張した。そうした教育を実践し、黒船に乗ろうとした吉田松陰を引き合いに「(松陰が開いた)松下村塾の学生にまず聞いたのが『なぜ学びたいのか』だった。探究心や好奇心を持ち行動できる子どもを育てることが、AI時代に必要な教育だ」と語った。

池田氏は、自校の生徒が「化粧禁止」のルールに異議を唱えたエピソードを紹介した。なぜいけないのかを生徒たちに考えさせること、そして、先生と生徒が対話しながら問題解決に取り組むこ

●国際舞台視野に

APUは学生約5800人(大学院含む、今年5月現在)のうち、半数を91カ国・地域からの留学生が占める。教員の半数も外国籍という「多文化共生のキャンパスで、国際舞台で活躍できる人材の育成を進めてきた。昨年学長に就いた出口氏は、日本の国際競争力が落ちていることや、評価額10億米ドル以上の非上場ベンチャーを指す「ユ



出口治明氏
立命館アジア太平洋大学学長



浅田和伸氏
文部科学省総合教育政策局長

どの大切さを読み、「学び続ける子どもを育てたい」と語った。

「ニコン企業」が日本では極めて少ないことを、データを示しながら説明した。

日本の教育現場が育て、企業が求めてきたのは「我慢強く協調性があり、上司の言うことをよく聞く人だった」。これに対し、GAF A(グーグル、アマゾン、フェイスブック、アップル)やユニコン企業の創始者の共通項は「好きなことを徹底的に突き詰める力」や「常識を疑い、根底から考える力」。「人間は顔が違うのだからそれぞれ違っていい。当たり前。日本の教育界から『平

均』や『普通』という発想をなくすることがスタートだ」と主張した。

日本の教育界で最も危惧していることを「根拠なき精神論のまん延」と述べ、その一例に組み体操を挙げた。「1年間で数千人がけがをしているというファクト(事実)がある。チームワークが養成できるとか伝統だとか聞くが、人間ヒラミッドなどは欧米では体が柔らかく、運動神経抜群のプロであるサーカスの芸人だ」と批判し、データにと名付けている。浅田氏

●勉強は楽しく

AIや、あらゆるモノがインターネットにつながる「IoT」を活用し、少子高齢化や過疎化など

の課題を克服する。――。国の「第5期科学技術基本計画」(2016〜20年度)は、日本が目指す未来の社会像をこう示し、「Society5.0」だ」と批判し、データにと名付けている。浅田氏



シンポジウムには多くの教育関係者が集まった

は「5・0」時代に向けた情報正しく読みとり、正しく人に伝える科学的に考え、根拠は何かと考える――といった力のほか、「新たな価値を生み出す、あるいは使い方を考える感性や好奇心がとても大事になる」と強調した。

経済協力開発機構(OECD)が3年ごとに15歳(日本は高校1年)を対象に行う学習到達度調査(PISA)の15年調査で日本は学力は上位にあるものの、同じ年の国際教育到達度評価学会(IEA)の国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)では、数学や理科の勉強を「楽しい」、数学や理科を使う職業に「就きたい」と答えた子ども(中学2年)の割合は、いずれも国際平均を下回った。

浅田氏は嫌々勉強している可能性に触れ、「入試が終わっても自ら学ぶ力を中高でどこまでつけられるか。先生たちは教育のプロとして勉強は楽しいと思わせることが大事だ」と語った。

基礎学習が打開力磨く

3氏の講演の後、パネルディスカッションが開かれた。「AIの進化で学校の教育は変わるか」。コーディネーター役の毎日教育総合研究所の澤圭一郎・代表取締役社長の問いに、浅田氏は「学び方を身につけていけば新しい

課題に直面しても必要な情報を集めたり解決策を探したりできる」、出口氏は「どうなるかわからないことを心配してもしょうがない。読み書き、そろばんといった基礎的な力をちゃんと鍛えておけば問題ない」と述べ、基礎を身につけさせる学校教育の根幹は今後も変わらないとの見方を示した。

AIの普及で仕事の多くが失われる可能性が指摘されているが、池田氏は「どんな形であれ仕事は残るだろう。今は人口減と人手不足がセットになっているので、ミスマッチングするからだ」とAIとの共生を鍵に挙げた。

AI時代を生き抜く「考える力」を育むために、大人に求められる役割とは何か。池田氏は、幼少期に読書で考えを深め「大人が言うそのようなもの」に反発を感じた自身の経験をふまえて「へりくつに周囲の大人は付き合い、議論してくれた。これが学校教育に大事なことではないか」と提言した。

浅田氏も「子どもに『何でそう思うの?』という問いを与え続け、かつ一生懸命に答えようとする子どもの話を折らないでじっくり聞いてあげること」と述べ、両者の意見は一致した。

出口氏は「数学、ファクト、ロジック(論理)」で物事を見極める訓練をする必要性を訴え、「まずは大人自身が探究力をつけることに尽きる」と語った。

「子どもの気持ち」は休みました